



「むこう岸」
安田 夏菜／著 講談社 (YFヤ)

和真は、以前エリート私立中学へ通っていたことを秘密にして、今の公立中学へ転入した。しかし、同じクラスの榊希にこのことが知られてしまう。そして、これをネタに彼女の友人に勉強を教えることを強制される。そんな彼女の家は生活保護を受けており、生活は厳しく、将来の夢を諦めないといけないような状態だった。彼女のことを知った和真は、生活保護について調べる。




「カーネーション」
いとう みく／作 くもん出版 (YFイ)

中学生の日和は、母親の愛子からきられていると感じている。それが決定的になったのは、妹が生まれたときだった。めったに笑わない愛子が、妹には笑顔を見せたのだ。それでも日和は、愛子から愛されるときがいつか来ると信じていた。また、愛子のほうも、日和が自分の娘なのになぜか愛することができないと悩んでいたのだった。




「赤毛証明」
光丘 真理／作 くもん出版 (YFミ)

堀内めぐは、中高一貫校に通う中学1年生。ごくふつうの学園生活を送るはずだったのに、生まれつきの茶髪のせいでそうはいかなくなった。この学校では、外見に関する校則が厳しく、毎朝、校門で行われる頭髪色彩チェックで、先生から毎回注意を受けるからだ。それが嫌なめぐは、「赤毛証明」を出してもらおうのだが、これを見るたび、自分が「ふつう」じゃないと言われているように感じてしまう。




「ぼくがスカートをはく日」
エイミ・ポロンスキー／著 学研プラス (Y933ボ)

グレイソンは密かに本物の女の子になりたいと思っている男の子。普段は、みんなにバレないように、想像力を働かせて、自分が女の子になった姿を思い描いたりして過ごしていた。そんなある時、グレイソンは、学校で演劇のオーディションがあることを知る。彼は勇気を出して、女神役のオーディションを受けるのだが、これがいろいろな事件を起こすことになる。



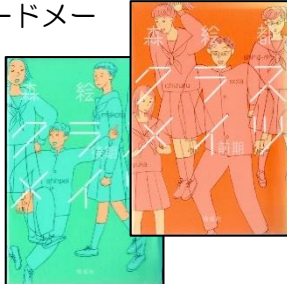
「ヴァンダーカンマー ここは魅惑の博物館」
榎崎 茜／著 理論社 (YFカ)

中学2年になった瀬川学は、同じクラスの4人と県立自然史博物館で職場体験をすることになる。彼らはそれぞれ魚類、古脊椎、鳥類などの担当にわかれて博物館の仕事を手伝う。さて、博物館ではどんなことを体験し、その仕事を通して5人が感じとったこととは？




「クラスメイツ 前期・後期」
森 絵都／著 偕成社 (YFモ1・2)

常にクラスみんなのことを考えているクラス委員長のヒロ、クラスのお笑い担当でムードメーカーの心平など、北見第二中学校の1年A組の24人それぞれ一人ずつを主人公にしてストーリーが展開していく連作短編集。




「あらしのよるに」
きむら ゆういち／著 小学館 (YFキ)

ある嵐の夜。ヤギのメイは嵐から身を隠すため、小さな小屋へやってきた。しばらくして、この小屋にやってきたのは、なんとヤギが好物のオオカミだった。しかし、暗闇のため、お互いが何ものであるかわからないふたりは意気投合する。翌日に会ったふたりは、お互いが天敵同士だと知り、戸惑う。




「縞模様のパジャマの少年」
ジョン・ポイン／作 岩波書店 (Y933シ)

ベルリンから見知らぬ土地へと引っ越してきた9歳のブルーノは、友だちとも離れ離れになってしまい、退屈な日々を過ごしていた。そんな彼が興味を持ったのは、部屋の窓から見えるフェンスのむこう側にいる縞模様のパジャマを着た人たちだった。ある日、フェンスのまわりを探検していたブルーノは、あの縞模様のパジャマを着た同い年の少年と出会う。



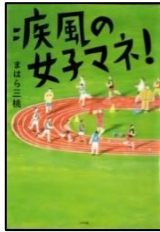
「ぼくにだけ見えるジェシカ」
アンドリュー・ハリス／作 徳間書店 (Y933ボ)

縫い物が好きなことがクラスメイトに知られてから、学校で孤立するようになったフランス。そんな彼がひとり校庭にいと、1年ほど前に亡くなって幽霊となったジェシカと出会う。なぜかフランスには彼女の姿が見えるし、話もできるのだが、それにはジェシカが幽霊になってこの世にいることと何か関係がありそうで…。




「疾風の女子マネ！」
まはら 三桃／著 小学館 (YFマ)

高校に入学した咲良は、部活に入るなら運動部のマネージャーだと決めていた。その理由は、なんとイイ男狙い。そんな彼女が入部したのは陸上部。入ったばかりの頃は、陸上の経験も知識もなく、ついていくのが大変で、そのうえ、先輩マネージャーが怖くて辞めようとも思っていた。しかし、咲良は部員たちの走る姿を見るうちに徐々に陸上の魅力にはまってしまう。



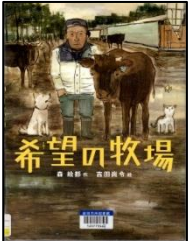
「ぼくは13歳、任務は自爆テロ。」
永井 陽右／著 合同出版 (Y316ボ)

悲惨なテロは今でもなくなることなく続いています。世界中の人びとがテロを憂慮していますが、中には、テロの標的になることを恐れ、この問題に関与しないようにする国もあります。そんな状況を知った著者は、大学生のときにソマリアという国を支援するNGO「日本ソマリア青年機構」を立ち上げます。そこでの活動はどんなものだったのでしょうか。また、著者が考えるテロや紛争の解決策についても紹介します。




「希望の牧場」
森 絵都／作 吉田 尚令／絵 岩崎書店 (Eキ)

オレは、肉牛を育てている牛飼い。東日本大震災のあとに起きた原発事故で、オレの牧場は「立ち入り禁止区域」になった。役人は、ここに住まないようにと言ってきたが、オレは住み続け、牛の世話をした。放射能をあげたせいで売れなくなった牛を生かし続けるのは、意味がなく、バカみたいなのかと考えながら。




「星の王子さま」
サン＝テグジュペリ／作 岩波書店 (Y953ホ)

砂漠に不時着した飛行士。そこで出会ったのは「星の王子さま」だった。この王子さまが飛行士に語ったこととは？




「死体が教えてくれたこと」
上野 正彦／著 河出書房新社 (Y498シ)

監察医とは、亡くなった人にどこか不審な点があると、検死や解剖をして死因を調べる仕事です。長年、監察医として活躍してきた著者が、生きている人を診る医師ではなく、死んだ人を診る監察医を選んだ理由や、命の大切さについて語ります。




「ぼくは恐竜探検家！」
小林 快次／著 講談社 (Y457ボ)

数々の新発見をしてきた恐竜学者の著者が、いかにして学者にまでなったのかを少年時代から語ります。また、恐竜学者になるために必要なことについても解説します。



「わすれられないおくりもの」
スーザン・バーレイ／さく・え 評論社 (Eウ・7)

あるところに、とても年をとったアナグマがいました。彼は、みんなからとてもたよりにされていて、困っている友だちはみんな助けてあげました。そんなアナグマが、ある日、死んでしまいます。友だちはとても悲しむのですが、みんなで思い出を語るうち、アナグマが残してくれたものに気づきます。



「どんなかんじかなあ」
中山 千夏／ぶん 和田 誠／え 自由国民社 (Eド)

目の見えない友達を持つぼく。目が見えないってどんな感じなのかを知るために、ぼくは目をつぶって考えてみた。そこで気づいたこととは？

